

東北 VALUE SIGHT 秋田



秋田県立大学 教授 生物資源科学部長
吉澤 結子 (よしざわ・ゆうこ)

東京都出身。
北海道大学大学院修了（理学博士）。
カナダ・アルバータ大学研究員、北海道文教短期大学
助教授を経て、秋田県立大学開学時に生物資源科学部
助教授として着任、2007年より教授。2014年4月から
生物資源科学部長を務める。
2013年12月に「あきた郷土作物研究会」を設立し、以
降会長を務める。

あきた郷土作物研究会：http://www.akikyo.net/
秋田県立大学：http://www.akita-pu.ac.jp/index.htm

地域で親しまれている伝統野菜の中には、世代交代
や食生活の変化に伴い、その生産が困難に面している
ものが少なくない。

秋田県立大学の吉澤教授は、あきた郷土作物研究会
での活動を通じて伝統野菜を含めた伝統作物の生産振
興等に努めながら、こうした活動が、地域の文化ひい
ては地域そのものを守ることに繋がるとの思いを強
くしている。

伝統野菜で 地域を元気に

伝統野菜が直面している危機

私は平成11年の秋田県立大学設立時に教員として
採用され、秋田に移り住んで今年で17年目になる。
折りにつけ秋田の食べ物や祭りや伝統芸能にふれ、
秋田の伝統文化の豊かさや人情を心地よく感じなが
ら、楽しく充実した日々を過ごしている。

そうした中、一部の地域にだけ伝わっている伝統
野菜が秋田県には数多くあり、その野菜に対する生
産者の並々ならぬ愛着とこだわりがあることを知る
機会があった。

このような野菜は単なる食材ではなく、その栽培
や調理などを通じて地域文化そのものとなっている
ものもある。しかし、すでに生産されなくなったもの、
種子が失われてしまったもの、生産者の高齢化
で生産困難になっているものなど、その存在が危機
に直面している場合も多い。伝統野菜が失われれば、
その地域の伝統文化も失われてしまうであろう。こ
のような危機感に突き動かされるように、あきた郷
土作物研究会の設立（平成25年12月）に関わること
になった。

に掲載されている品目は量の多少はあっても入手は
現在可能である。



「秋田の伝統野菜」(全4ページ)表紙ページ。

秋田の伝統野菜

秋田県では、平成15～17年に県内全域で調査を行
い、野菜21品目がリストアップされた。また、その
後の調査で新たに9品目が見つかり、現在は全30品
目がリーフレットにまとめられて秋田県HPでも見
ることができる。秋田県では「伝統野菜」を以下の
3点、①昭和30年代以前から県内で栽培されている、
②地名、人名がついているなど秋田県に由来してい
る、③現在でも種や苗があり生産物が手に入る、を
満たすものとしているので、リーフレット(右図)

あきた郷土作物研究会の取り組み

研究会の名称に「伝統野菜」ではなく「郷土作物」
を用いた理由は、野菜だけを対象にするのではなく、
果実やキノコ・海藻など秋田で生産されるさまざま
な作物を対象とするためである。

研究会の目的はいくつかあるが、郷土作物の学術
的調査と種の保存を基本として、これをもととした
農業と食品関連産業との連携による郷土作物の生産
振興と流通活性化、郷土作物が地域食文化に果たす

役割の解明、さらには郷土作物による安全・安心で
豊かな食生活の提言が重要な柱となっている。この
ため、本研究会には大学や公設試験研究機関に加え、
食品の製造・流通・販売にかかわる企業、外食産業、
観光業、金融機関、そして一般市民など、さまざま
な立場の方々が会員として参加しており、会員数は
現在95名6団体である。研究会の活動としては、シ
ンポジウムの開催、事例紹介・勉強会の開催、研究
会ニューズレターの発行などであり、これらを通じ
て郷土作物に関連する情報の収集・発信と会員の交
流に努めている。

研究会設立前の勉強会を含めると、これまで5回
の会合を開催している。そのたびに特定の作物を取
り上げて、栽培地の見学や生産者による栽培状況の
説明、その作物にまつわる伝統文化の紹介とその作
物を用いた料理の試食などを行っている。見学会と
しては、これまでに大屋梅や八木にんにくの畑とカ
ナカブ焼畑栽培を見学し、山内ににんじん、横沢曲が
りねぎ、檜山茶および新処なすについては生産者に
よる事例紹介を通じた勉強会を行った。

いずれの郷土作物にもそれぞれにまつわる伝承や
物語があり、これが地域の文化や誇りに結びついて
いる。郷土作物を守ることは遺伝資源の単なる保護
にとどまらず、地域の文化を守ることであり地域自
体を守ることに繋がることが、本研究会の活動を通
じて強く感じるようになった。

平成26年11月には農林水産省、秋田県、銀行等の
支援の下「伝統野菜全国シンポジウム」を共催した。
この中で政府も伝統野菜振興を支援するとの方針が
説明された。また、加賀野菜のブランド化に奔走さ
れた小畑文明氏、江戸懐石金茶流の柳原宗之氏や野
菜パティシエの柿沢安耶氏による講演が行われ、伝

統野菜が持つ意義や料理に使用したときの特徴につ
いて興味深いお話を頂いた。このときの講演の詳細
については、あきた郷土作物研究会のHPをご覧頂
きたい。

伝統野菜で地域を元気に

まだ「発見」されていない伝統野菜もあるかもし
れないし、消滅したと思われるけどどこかの納屋
で種子が眠ったままのものもあるかもしれない。こ
のような伝統野菜を発掘し、伝統食材として次世代
に伝えていくことも本研究会の使命である。食べる
人、加工や販売をする企業があれば、生産する農家
もやる気が出る。

伝統野菜は地域とのつながりが密接である反面、
大規模生産には向かないものが多い。このためどん
なに優れていても県内外に定常的に供給することは
困難である。これが伝統野菜の特徴であり、多くの
場合「秋田に来なければ食べられない」のだから最
高の呼びかけメッセージにもなる。多くの人々が旬
の季節にその土地を訪れ、その地域の伝統文化に触
れて伝統野菜を使用した料理を楽しむという流れを
作ることができれば、観光産業や食品産業の活性化
につながり地域振興のきっかけとなるだろう。

地方創生と言われながら、決定打の提案はまだ乏
しい。伝統野菜を核としてさまざまな立場の方々が
集まり交流を続けていくことで、オール秋田の活動
へつなげることが大事である。あきた郷土作物研究
会の活動はまだ始まったばかりだが、多くの方々に
秋田の郷土作物を知ってもらい食べてもらうことで、
地域の良さや個性をもっと売り出し、たくさん買っ
て頂きたいと考えている。